昨年3月11日の東日本大震災により、名取市も海岸部を中心に甚大（じんだい）な被害を受けました。残念ながら市内に所在する文化財の中にも、地震により大きな被害を受けたり、津波で流出してしまったりしたものなどがあります。ここでは、これまで長く地域に受け継がれ、親しまれてきた文化財の被災状況や現在の状況などについてお知らせします。

《被災した主な文化財》

本市の生い立ちや地域の特色などを理解する上で欠かすことのできない、国・県・市の指定になっている文化財の中にも、大きな被害を受けているものがあります。また、これ以外にも、数多くの文化財が破損・流出などの被害を受けています。

《国指定文化財》

雷神山古墳　洞口家住宅

旧中沢家住宅　熊野那智神社懸仏

《登録文化財》

開運橋

伊達持宗公夫妻供養五輪塔

《市指定文化財》

新宮寺文殊菩薩像　耕龍寺山門

十三塚出土弥生土器　大館跡出土遺物

東光寺宝筐印塔　大塚山古墳

《一般文化財》

北釜千体仏　ほか

《国指定史跡　雷神山古墳（らいじんやまこふん）》

全長 168m で東北最大規模の前方後円墳として知られている雷神山古墳では、史跡の標柱（ひょうちゅう）の倒壊や、後円部の墳頂部が幅約 1m・長さ約 3～5m にわたり陥没（かんぼつ）するなどの被害があったことが分かりました。墳頂部が陥没した原因については明確ではありませんが、墳丘の内部に空洞となっていた部分があったためだと思われます。しばらくの間は、危険防止や陥没穴の拡大を防止するために柵や板などで穴を塞（ふさ）いでいましたが、その後、国の専門官などの指導により、本格的な修復を行うまでの間は陥没した穴に土嚢（どのう）などを充填（じゅうてん）し、これ以上被害が拡大しない様にしておくことになりました。

折れた史跡の標柱

陥没(かんぼつ)した墳丘(ふんきゅうぶ)部

応急的に穴を埋めた様子

現在の様子

《国重要文化財　旧中沢家住宅（きゅうなかざわけじゅうたく）》

十三塚運動公園内にある重要文化財 旧中沢家住宅は、おおよそ 18 世紀後半頃に建てられた江戸時代の中型の農家建築です。もともとは、市内の愛島塩手（めでしましおて）にあった建物で、昭和 50・51 年に現在地に移築・復原したものです。震災では、建物内外の土壁が崩落したり柱の一部がずれたりしましたが、建物の骨組みには大きな被害はありませんでした。国の専門官の指導・補助を得ながら、昨年 12 月から本格的な修復工事を行い、今年の 8 月で修復工事を完了しており、9 月からは中断しておりました一般開放も再開することが出来ました。

震災直後の外壁の状況

震災直後の内部の状況

修復後の外観の様子

修復後の内部の様子

《国重要文化財　洞口家住宅（ほらぐちけじゅうたく）》

重要文化財洞口家住宅は、江戸時代の宝暦（ほうれき）年間（1751～1763）頃に建てられたと考えられている大型の農家建築です。約 1,500 坪の堀で囲まれた屋敷地や馬屋・表門も景観上重要な要素であることから、母屋と併せて国の指定文化財になっています。震災では、母屋の柱が裂けたり、傾いたり、多くの部分で土壁が崩落する等の大きな被害を受けました。洞口家住宅についても旧中沢家住宅と同様に、国の専門官の指導・補助のもと、昨年 12 月から修復工事を行っており、現在も修復作業中です。　なお、洞口家住宅では、母屋北側に所在する座敷蔵・味噌蔵、表門の道路を挟んで南側にある米蔵の計 3 棟の土蔵と敷地の一部についても、屋敷の景観上重要な要素であることから、平成 24 年 7 月 9 日付で国の重要文化財として追加指定されました。

震災直後の外壁などの状況

震災直後の内部の様子

修復工事中の母屋

《国重要文化財　熊野那智神社懸仏・銅鏡》

　名取熊野三社の一つ熊野那智神社に伝わった、懸仏・銅鏡は、明治31 年(1899 年)の那智神社再建の際に、社殿の床下から見つかったものです。鏡面に仏像などを配したものを、神社などの柱や軒等に吊るし懸けて奉納したもので、その多くは鎌倉時代以降のものと考えられています。震災では、展示・保管してあった懸仏などが、落下・破損するなどの被害を受けました。その後、被災地の文化財を保護・救出する文化財レスキュー事業によって、現在は、東北歴史博物館に仮保管されております。

震災直後の懸仏・銅鏡の様子

《国史跡　飯野坂古墳群（いいのざかこふんぐん）　薬師堂古墳（やくしどうこふん）》

国指定史跡である飯野坂古墳群は、名取が丘団地などが所在する愛島丘陵の北東端部に位置する古墳群で、5 基の前方後方墳（薬師堂古墳・宮山古墳・山居古墳・山居北古墳・観音塚古墳）と、2 基の方墳（観音塚北 1・2 号墳）が密集して分布しています。飯野坂古墳群では震災による大きな被害はありませんでしたが、薬師堂古墳脇の柵が一部傾いたり、破損したりしました。

地震の揺れで傾いた柵

《市指定　東光寺石造宝篋印塔》

とうこうじせきぞうほうきょういんとう

宝篋印塔とは、もともとは宝篋印陀羅尼経というお経を収め護持するための石塔で、礼拝・供養すれば大きな功徳があると考えられていたようです。日本では、鎌倉時代以降に供養塔や墓石などとして造立されたものが多いようです。

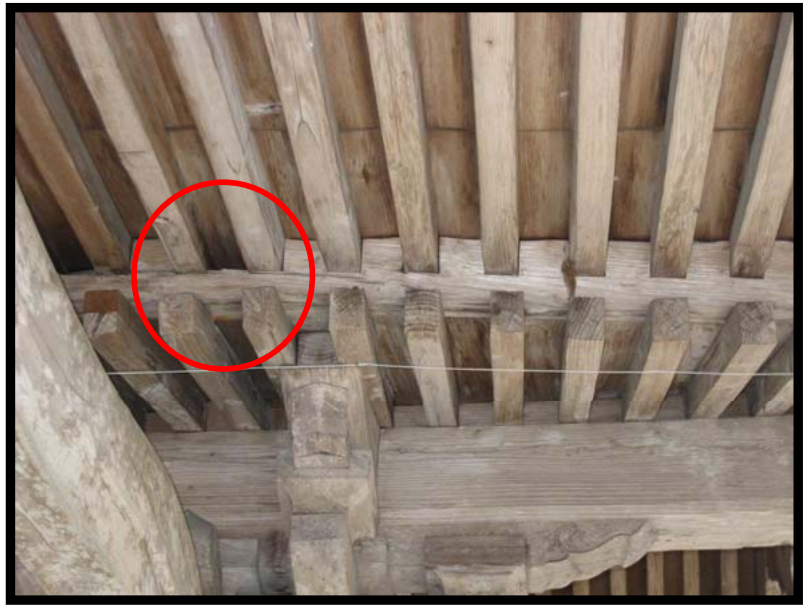
名取市指定の宝篋印塔は、下増田字丁地に所在する東光寺境内に所在するもので、以前は増田後島と下増田本村との境付近にあったものですが、その後に現在地に移設されたものです。この宝篋印塔には寛延 4 年（1751 年）の銘があり、江戸時代中頃に造られたものと考えられます。地震の大きな揺れにより、塔身と基礎部の間にズレが生じてしまいましたが、現在は元通りに修復されています。

震災後の様子

修理後の様子

《宮城県指定　熊野神社本殿》

　名取熊野三社の内の１社である熊野新宮社（熊野神社）の本殿は、江戸時代の初め頃に建てられたと考えられる建物です。熊野信仰との関わりが深い建築様式で建てられたものであり、建築学的にも貴重な建造物であることから県の指定文化財に指定されています。本殿は拝殿の奥に南面して建つ３棟の建物で、中央に証誠殿、向かって右側に那智飛龍権現社、左側に十二社権現社があります。３月11日の震災の際には、被害はありませんでしたが、後の４月７日の大きな余震により、十二社権現の屋根を支える木の一部が折れ曲がっていることが分かりました。



折れ曲がった屋根材→

《市指定　伊達持宗公夫妻供養五輪塔》

だてもちむねこうふさいくようごりんとう

五輪塔とは、仏教における宇宙（あらゆる世界）を構成する、地・水・火・風・空の5つの要素を石塔に表現したものです。この2基の五輪塔は、応仁元年（1467年）に、伊達家11代の伊達持宗公の五男である蕊源和尚が開山したと伝えられる耕龍寺境内にあるものです。

ずいげんおしょう

どちらの五輪塔にも造られた年代や、誰のために立てたものなのかなどは刻まれていませんが、大きいものが持宗公の、小さい方が同夫人のものと伝えられています。地震の揺れにより両方とも倒れてしまいましたが、現在は、もとの状態に直されて仲良く並んで建っています。

地震で倒れた五輪塔

現在の五輪塔の様子

《市指定　耕龍寺山門（こうりゅうじさんもん）》

耕龍寺山門は、仙台藩の家老を務めた片倉家の居城であった白石城の門の一つを、明治初め頃に現在地へと移築したと言われているものです。総ケヤキの素木（しらき）造りで、屋根は切妻造り（きりづまづくり）の桟瓦葺（さんがわらぶ）きの薬医門（やくいもん）に近い門です。震災により、向かって右側の袖塀（そでべい）が倒壊するという大きな被害を受けましたが、現在は修復のための工事も終了しています。

倒壊した袖塀（そでべい）

修理後の様子

《市指定　新宮寺文殊菩薩像》

熊野神社（新宮社）境内の入口脇にある新宮寺文殊堂内に伝わった獅子の上に乗る文殊菩薩像で、つき従う「善財童子」・「仏陀波利三蔵」・「最勝老人」・「優填王」の４体の像も一緒に伝わっています。名取熊野三社とのかかわりが深い、山形県寒河江市の慈恩寺に伝わる文殊菩薩像と作り方が似ていると言われているもので、平安時代末頃に作られたものと考えられています。地震の揺れにより厨子の中で倒れてしまい、光背の一部などが破損してしまいましたが、文化財レスキュー事業によって応急的な修理が行われています。

震災で落下した文殊菩薩

破損した光背と文殊菩薩

応急修理された文殊菩薩像

《北釜（きたがま） 観音寺（かんのんじ） 地蔵堂（じぞうどう）の千体仏（せんたいぶつ）》

下増田の北釜に所在する光明山観音寺の参道脇にあった地蔵堂には、千体仏が伝わっていました。地蔵堂の上段中央に1体の地蔵菩薩（じぞうぼさつ）（極楽浄土の阿弥陀如来（あみだにょらい）をあらわす）と、その左右にそれぞれ5体の地蔵菩薩（十王思想における十王を表す）を配し、十数段あるひな壇に一体ごと表情や姿の異なる大小数百の地蔵菩薩立像（極楽浄土の阿羅漢（あらかん）の姿＝仏の弟子となり悟りを得た者で、現世の我々の姿を描写した姿）が安置されています。この千体仏のように、江戸時代の整然と並んだ姿を今に残す事例は県内でも数少ないものであり、大変貴重なものとして名取100選にも選ばれていましたが、残念ながら震災の津波により、地蔵堂ごと流されて失われてしまいました。

被災前の地蔵堂の様子

被災前の千体仏の様子

《市指定　十三塚遺跡出土弥生土器・名取熊野堂大館跡出土遺物》

十三塚遺跡出土弥生土器は、十三塚公園整備のために実施した昭和53年度の調査で出土した弥生土器です。九州地方の弥生時代初め頃の土器である遠賀川式土器と特徴が似ているため、弥生時代の初め頃にも東北地方へ西日本の文化が伝わってきている事が分かる貴重な資料です。

名取熊野堂大館跡出土遺物は、昭和59・平成2・3年度に行われた中世の山城である熊野堂大館跡の調査で見つかったものです。常滑焼の大型甕・中型甕・擂鉢、古瀬戸の灰釉瓶子一対・灰釉銚子・灰釉平碗の計7点の陶器で、鎌倉末～室町時代初め頃のものと考えられています。

これらの土器・陶磁器をはじめとする考古資料は、市の収蔵施設に保管されていますが、震災の際には、収蔵品の中にも棚から落下して壊れるなどの被害を受けたものがあり、現在も修復作業を進めている所です。

破損した遺物

被災後の収蔵庫の様子

《市登録　開運橋（かいうんばし）》

開運橋は、昭和３年（1927 年）に貞山堀（ていざんほり）に架けられた、現存する市内唯一のアーチ橋で近代文化遺産の１つでした。橋長 30.72m・幅員 3.3m の鉄筋コンクリート製の橋で、昭和初期からの歴史を持ち、貞山運河やかつての閖上の街の風情を今に伝える貴重な橋として親しまれ、名取 100 選にも選ばれていました。昭和 53 年 6 月に発生した宮城県沖地震の際に床盤の一部が落下してしまったため、その後は車両の通行を止めて歩道橋として利用しており、平成元年（1989 年）には市による補強・補修工事も行われ、最近までその端整な姿を見ることができました。昨年の震災による津波によって橋全体が落ちて流されてしまい、開運橋の今後の取り扱いなどに関して話し合いが行われましたが、残念ながら現状を回復することが困難なため、平成 24 年 10 月 1 日付けで市の登録文化財から解除されました。

震災で貞山堀（ていざんぼり）に落下した開運橋